
奇跡の子

夏のラジオ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

奇跡の子

【Nコード】

N7925C

【作者名】

夏のラジオ

【あらすじ】

不妊で悩む夫婦河岸太郎と葉子は児童養護施設『夢見の里』で最初に出会った少女・もみじを養子に取ろうと決意。一ヶ月の試験的共同生活を経て、三人は本当の家族となる事が出来るのか。

第一話

「私と妻は勤め先の会社で知り合いました。同い年ですけど、彼女は短大卒、私は大卒で入社しましたので彼女の方が二年先輩ということになりますね。結婚したのは私達が二十六の時でした。二人とも子供が欲しかったので、妻は退職し専業主婦として妊娠に備えることにしたのですが……」

「不妊症ですね」

医師の宣告は俺達夫婦を愕然とさせた。

「不妊症……ですか」

医師は深くゆっくりと頷く。

「気を落とさないでください。これから根気良く不妊治療を続けていけば、きっと回復するはずですよ」

「分かりました。ね、あなた気を落とさないで。頑張って治療しましょう」

葉子が明るい調子で言う。自覚は無かったが相当落胆した顔を見せていたらしい。

実際落胆していたのだ。

それは葉子だって同じはずだったが、彼女の表情を見る限りではそんな様子は全く無く、少し安心した。

「そうだな。よし、頑張ろう」

「うん。あなたもこの子の為にお仕事頑張らなきゃ駄目よ」

葉子は引き締まったお腹をさすった。

頑張ろう。そこに宿るべき命の為に。

「それから二年間、私達は不妊治療に通い続けました。それでも妻のお腹に新しい命が授かることはありませんでした。何度か妊娠の兆候はあったのですが、それが勘違いだと分かる度に、私は肩を落として時には涙さえ流したのです。そして妻はそんな私をいつも慰めてくれました。彼女は本当に強い女性だな、とそう思っていましたよ。……私は本当に馬鹿でした」

玄関を開けると、ダイニングの灯りが点いていなかった。俺は「変だな」と思いつつも、特に気に留めることなく、靴を脱いで部屋に上がる。壁のスイッチをオンにし、ダイニングの灯りを点けた。特に変わった様子は無い。

「葉子。いるのか？」

反応は無い。鍵は掛かっついていなかった。もしかして既に眠ってしまったのか、それとも風呂にでも入っているのだろうか。いずれにしても部屋の灯りが点いていないことが非常である。

その時、浴室で僅かに物音が聞こえた。

やはり風呂なのだろうか。

「葉子？」

俺は妻の名を呼びながら浴室の戸を開けた。

背筋が硬直する。灯りは点いていなかったが、暗闇の中に薄らと人が倒れこんでいるのが分かった。

「葉子？ 葉子なのか？」

灯りを点ける。それは確かに葉子だった。浴槽にぐったりともたれかかり、右手を湯船の中に浸していた。

一瞬にして額から大量の汗が滲み出た。

ようやく事態を飲み込んだ俺は慌てて彼女を抱き上げる。浴槽の中は彼女の血で真っ赤に染まっていた。

「葉子！ おい！ しっかりしろ！」

彼女は意識を失っていた。俺はハッと気づき、電話機の元へ走る。途中ゴミ箱に躓いて、中のゴミが散乱したが、それに構っている場合では無かった。

「もしもし！ もしもし！ あの……救急車をお願いします。河岸太郎です。妻が……妻が大怪我を……！ 手首を切つて……！」

奇跡の子

「あと数分発見が遅れたら妻は助からなかったそうです。その時は神様に感謝しましたよ。あの日は、仕事帰りにいつも立ち寄る駅前の書店をスツと通り過ぎたんです。別に胸騒ぎがしたとか、そう

ゆづ訳じゃなかったんですよ。たまたまあの日はお客さんが多くて……。雑誌コーナーに立ち読みできるスペースが無かったんです」

病室のベッドに横たわる葉子の顔をまともに見ることは出来なかった。彼女も同じらしく、虚ろな目をただ窓の外に向けている。

「ごめんなさい……。私、どうしても我慢できなかった」

「謝るのは俺のほうだ」

俺は彼女の手を強く握り締めた。「なんで気が付かなかったんだろっ……お前をこんな風にずっと追い詰めていたなんて」

「お願い、そんな顔しないで。」

彼女が視線だけをこちらに向ける。「ごめんなさい。本当にごめんなさい。子供を産めないばかりか、あなたにこんな迷惑まで掛けて。本当に私……あなたにとってお荷物でしかないよね」

「馬鹿なこと言うな！」

思わず怒鳴ってしまった。「子供がなんだ！子供が欲しいからっただけでお前と結婚したわけじゃないんだぞ」

「もういいー！」

彼女が叫ぶ。次第に繋がれた二人の手が小刻みに揺れ始める。「もういい……。もういいよ」

「葉子……」

彼女は泣いていた。俺には滅多に見せない姿である。

「殺して……」

一瞬にして顔が青ざめる。「もう駄目なの。これ以上生きていても私……。お願い！私を殺して！」

彼女の懇願する目が胸に突き刺さる。

おそらく彼女は怖くて怖くて仕方なかったのだろう。俺にとっての彼女の一番の存在意義が子供だと勘違いし続けてきたのだ。自分が必要とされなくなる恐怖……。俺の重荷となってしまう恐怖……。無論、俺にとっての彼女の存在意義は子供なんかではない。それは確かだった。しかし、まずは彼女を立ち直らせなければ何も始まらない、とそう思った。私は彼女の顔を見据えて言った。

「養子だ！ 養子を取ろう！」

彼女が目を大きく開ける。

「養子……？」

「ああ、そうだ。養子を取って育てるんだ」

「でも、養子だったら私達の子って言えな……」

「関係ない！」

彼女の言葉を遮る。「俺達の子だ!」

それを聞き、彼女の瞳がまた潤み出した。やがて瞬きと同時に頬に一筋涙が流れた。

「うん」

「笑ってしまいますよね。未だに子供の発想だなと思いますよ。そもそもどうやったら養子を取ることが出来るかなんて全く分からな
いし、誰を養子にするかだって全く決まっていななんですから。実
際あの時は私もその場しのぎで口にしたんです。どうにか彼女を立
ち直らせようよね。でも……私達の中で養子を取るといふ考えは次
第に現実的なものとなっていったのです」

第二話

ピンポンとチャイムが鳴った。俺と葉子は顔を見合わせ、ほぼ同時に立ち上がる。

玄関の扉の先には眼鏡を掛けた気の良さそうな老婆が一人立っていた。

「あ、池内先生ですか？」

「はい、あらあらお二人揃って出迎え頂か無くとも」

「いえ、どうぞお上がりください」

彼女は「失礼します」とゆっくりとした動作で靴を脱ぎ部屋へ上がった。そのままリビングへと通す。

「まあ、素敵なお部屋ですね。とても暖かみがあった」

池内先生がリビングを見回し、腰を掛けながら言う。壁に掛かったポップなデザインの時計や棚に飾られた猫のぬいぐるみなど、いずれも葉子の趣味であった。

「今日はわざわざ遠いところ足を運んで頂き、光栄です」

俺が正座で頭を下げると隣の葉子もそれに倣った。

「いえいえ、こちらこそ。どうか子供達を……誰になるのか分かりませんが、よろしくお願いします」

先生の丁寧な挨拶に俺達夫婦は再び頭を下げた。「それでは早速お話を進めさせて頂きます。養子縁組について、ある程度ご勉強なさいましたか？」

「はい」

彼女は微笑みながらうんうんと一、二度頷く。

「私としても、子供達の幸せを考えたら……河岸さん達みたいに仲の良さそうなご夫婦に貰われることは願ってもないことです。ただ……」

先生の顔がやや険しくなる。「あの子達が抱えている心の傷は私達には計り知れないものがあるでしょう。実子を持つことだけでも凄く大変なことです。養子を取るというのはその倍、いや三倍は大変なことだと覚悟して頂かないといけません」

「確かに」

口を開いたのは葉子だった。「見ず知らずの子を突然家に迎えるなんて、想像もつかないほど大変なことだと思います。だけど私達にとつての養子縁組はその苦労以上の喜び、感動をきつともたらしてくれるだろうと思ひ、夫と二人で決断したんです」

先生はまたうんうん、と頷く。

「ええ、当然そうですね。分かりました。一度子供達に会いに来てやって下さい。まずはどの子を養子に取るのかを決めなければ始まりませんし」

「は、はい」

「但し施設の中ではむやみやたらに子供達に話し掛けてはいけませんよ」

俺と葉子は目を丸くする。

「何故でしょうか？」

不思議に思い、訊いてみた。

「あの子達も分かってるんです。あなた達が何をしにやって来たのかを」

「私達夫婦にとっては、やはり身寄りの無い子を養子に取るしか方法は無いだろうと車で三十分ほど走った場所にある『夢見の里』という児童養護施設に相談しました。院長の池内先生は私達のことを本当によく理解してくれまして、電話口ではありますが、法律上の養子縁組について最低限勉強しておくこと等幾つかアドバイスを頂いていたのです」

八月最後の日曜日、俺達はいよいよ『夢見の里』を訪ねてみることにした。池内先生には昨日の内に電話で伝えてある。

「ねえ、どんな子だろうね」

助手席に座る葉子が目を輝かせて聞いてきた。

「そうだな。凄いやんちゃ坊主だったらどうする?」

「うわ、やんちゃ坊主がもう一人増えるのか。大変になるなあ」

「どうゆう意味だよ、それ」

俺はそう言っただけで軽く笑った。

二人の間に子供が出来る瞬間が刻々と近づいていくにつれ、言いようのない不安が俺を襲った。あの日病室で思わず口にしてしまった『養子』という言葉。現実離れたあの言葉がどんどん一人歩きしてしまっているような気がした。

俺に覚悟はあるのだろうか。そして葉子も……そうまでして子供が欲しいと本当に思っているのだろうか

この不安を葉子にも、誰にも打ち明けることは出来なかった。打ち明けなければいけないはずなのに出来なかった。

「女の子もいいなあ。お料理教えてあげたり」

「そうだな」

実は俺達夫婦の中で一つのルールを決めてあった。

今回施設を訪れる一番の目的は『どの子を養子に取るか見定める』ということだったが、子供達を吟味し、中から一人決定するなどというのを俺達が出来るとは思えなかった。そこで葉子と話し合ったのだ。

施設で一番最初に出会った子を養子に取ろう、と。複数いた場合は最も近くにいた子を優先的に選ぶ。

尤も施設には様々な事情を持った子がいる。れっきとした親がお
り、何らかの事情により施設に預けられた子だっているだろうし、
既に高校や大学へ行く歳の子だっているだろう。どの子を養子に取
るかによって、養子縁組の方式も変わってくるが、俺達に迷いは無
かった。

とにかく一人の子に絞るのが先決だ。方式なんて後で悩めばいい。

上方にキリスト教の大きな十字架が見えた。池内先生が施設の目
印に、と話していたものだ。五十メートルほど離れたところにある
駐車場に車を止める。

『夢見の里』は想像よりもずっと小さな建物だった。周りは塀で
囲まれており、建物の正面に幅二メートルほどの門がある。俺達は
門を抜けるとそのまま玄関へ向かった。

庭に足を踏み入れた瞬間から緊張で胸が張り裂けそうだった。既
に始まっているのだ、俺達のルールが。

葉子も実感しているらしく、額に薄らと汗を浮かべ辺りをキョロ
キョロと見回している。

俺達は玄関から中を覗き込む。左右に廊下が伸びており、幾つか
の部屋が見えた。子供達どころか職員の姿も無く、施設全体がシー
ンとしている。

「すみません」

俺が呼び掛けると、しばらくしてすぐ近くの扉が開いた。一瞬息
を飲むが、そこから出てきたのは池内先生であった。

「河岸さん。お待ちしておりましたよ。子供達は今散歩に出ている
んです。院長室でお待ちください」

「そ、そうですね」

俺は少しだけ安心する。そして先生に促され院長室に入ろうとした、その時だった。

「あら、もみじちゃん、もう大丈夫なの？」

先生の視線の先を見る。中学生ぐらいの少女がポツンと立っていた。髪は肩ほどで切り揃えられ、上は टीーシャツ、下は ハーフパンツという姿だった。

胸が高鳴る。

少女を見据えながら、頬に汗が流れ落ちるのを自覚した。

葉子と思わず顔を見合わせる。彼女もきつと俺と同じことを考えているのだろう。

少女は無言でコクリと頷く。

「そう、あまり無理しないようにね」

先生は再び俺達夫婦に視線を移した。「すみません。さあ院長室へお入りください」

「は、はい」

口ではそう言ったが身体は動かなかった。それは葉子も同じである。

少女は不思議そうにこちらを見ている。黒目勝ちで吸い込まれそうな瞳だ。

「河岸さん？どうなさいました？」

俺達は少女から目を離さなかった。
目を離すことは出来なかった。

「……後に聞いた話なんですけど。その日彼女だけは体調不良で朝からずっと医務室で眠っていたんですって。驚くべきことに彼女が施設に入ってから十年もの間、一度も風邪なんて引いたこと無かったそうです。不思議なこともあるものですね。それが紅葉との出会いでした」

第三話

院長室に入り、まず目に付いた物は中心にとっしりと置かれた応接セットであった。ガラス製の小さなテーブルを挟み、立派な茶色のソファが二脚ずつ向かい合っている。どうやら此処は応接室も兼ねている様だ。

「どうぞ、お座り下さい」

池内先生に促され、俺達は扉側のソファに腰掛ける。「暑いでしょう。今、冷房を入れますね」

「あ、いえ。お構いなく」

俺の言葉を無視し先生はピツ、とりモコンのスイッチを押した。やがて部屋の隅にあるエアコンがゴォォと低い音を立て始めた。彼女も俺達の向かいのソファに腰掛ける。

「よく話し合いされましたか？」

そう言っただけ彼女はニコツと笑顔を見せる。つまり俺達が養子に取る子供についてだ。

「はい」

答えたのは葉子だった。「お互い色々な意見を出し合いました。それなりに大きな中学生ぐらいの子より、まだ赤ん坊に近い子の方がいいだろうか」

先生はうんうんと頷く。

「確かに……自分の境遇がよく分かっていない子の方が育てやすいかもしれないね」

「でも、いつかはその境遇について私達から告げなければならぬ、つて考えると、逆に大きな子の方がいいのかもしれないし」

「うーん」

先生が難しい顔で唸る。「答えは出ませんか？」

「いえ、答えは出ています」

葉子の言葉に先生は目を丸くする。

「と、言いますと？」

「どんな子でも良いんです」

「は？」

再び話そうとする葉子を制し、俺が補足する。

「何もおかしな話ではありません。もし普通に 葉子がお腹を痛めて子供を産んだとしたら、その子は紛れもなく俺達の子です。選ぶ余地なんてありません。それと同じなんです。俺達は神様に全てを委ねようと決心したんです」

「お、落ち着いてください」

そう言いながら彼女の方が明らかに動揺していた。「気持ちばかりですが、実子と養子では全く話は別です。そもそも実子なら元から赤ん坊だし、境遇について話さなければいけないなんて悩みも無いじゃないですか」

「とにかく」

俺は小さく首を振る。「大勢の子供達の中から、『この子なら上手くいく』『この子なら上手くいかない』なんて言ってるように、結局誰を選んでも上手くいかないんじゃないかと思えます」

先生は眉間に皺を寄せながら、しばらく沈黙した後、フウと大きな溜息を吐いた。

「分かりました……。じゃあ、どうやって貴方達のお子さんをお選びになるんですか？」

「ええ。実は話し合って既に決めてあります。この『夢見の里』で最初に出会った子を養子に取るうって」

「最初に出会った子？」

先生はそう呟き、やがてハツとした顔を見せた。

「はい」

俺は彼女の目をじっと見据えた。「池内先生。一度もみじちゃんとお話をさせて頂きませんか？」

「紅葉の名前が出た時、先生は困惑したような微妙な表情をなさいました。私は不思議に思いましたが、先生の話聞いてるうちに、彼女が何故あのような表情をしたのかが理解出来ました」

「率直に申し上げますと、あの子に親はいません」

それを聞いて俺は素直に嬉しかった。少女に親がいないと分かって嬉しい、というのはどうにも不謹慎だが。

「十二年前の秋でしたか、置手紙と一緒に此処『夢見の里』の門の前に捨てられていたのを、児童の一人が発見しました。乳母車に乗せられたままワアワア泣いてましたよ」

「そうでしたか……」

「あの子を養子に取るならば、普通養子縁組として家庭裁判所に申請する必要があります。まあ、それは問題ないでしょう。ただ、一番の問題は……」

「一番の問題は？」

俺達は先生の次の言葉を息を飲んで待った。「あの子自身の意志です」

「あの子の……もみじちゃんの意志ですか？」

先生は深く頷く。

「当然ながらもみじちゃんを養子に取るには、当人の意志も尊重されます。あの子はもう十年以上此処で暮らしていますから。今更環境を変えるということに抵抗があるかもしれません」

俺は葉子と顔を見合わせる。

確かにそうだな、と思った。あの子にとっては幼年期を過ごしたこの施設こそが故郷といえるだろう。そろそろ思春期を迎えようとする少女に家族など必要ないのかもしれない。

「もみじちゃんは幾つなんですか？」

葉子が再び先生に視線を移し、聞いた。

「一応、十二歳ということになっています」

捨て子ということとで、正式な生年月日は明らかじゃないのだろう。

「十二歳……か」

「どうなさいますか？彼女と話してみます？貴方達が良ければ私から話しておきますよ。今日は彼女……朝から体調不良なので、後日改めてという形になりますが」

「うーん」

はつきり言って俺の心は折れかかっていた。もっと小さな、別の子を探した方がいいんじゃないだろうか。

しかし次の瞬間、葉子のはつきりとした声で言った。

「はい、お願いします」

俺は驚いて彼女を見る。

「葉子……」

「何で驚いてるの？」

彼女はキョトンとした顔を見せた。

「だ、だって……」

「私ね」

俺の言葉を遮り、彼女が話す。「先生があの子を『もみじちゃん』って呼んだ時から、すごく運命的なものを感じたんだ。きっと神様が巡り合わせてくれたんだと思うの」

「どつゆつ」と？」

「『もみじ』って『紅葉』って書くでしょ？ ほら、私の名前が入ってる」

奇跡の子

「しばらくして子供達が散歩から帰ってきましたが私達は誰とも会話をすることなく、すぐに『夢見の里』を後にしました。『もみじ』という名前は、紅葉が拾われた当時の職員さんの一人が、季節に因んで名付けたんだそうです。予断ではありませんが『楓』という候補もあつたそうです」

第四話

『夢見の里』から歩いて五分程度の場所にそのファミリーレストランはあった。約束の時間まで後十五分ほどあったが、年の為店内を見回してみる。どうやらまだ来ていないようだ。

四人掛けのテーブルに案内され、俺と葉子は並んで席に着いた。

「はー、緊張するなあ」

葉子がそわそわとした様子で入り口を見る。

「あんまり堅くなるなよ。向こうだって多分緊張してるだろうからな」

「あなただって」

葉子のその言葉で初めて、差し出された冷水を飲む手が小刻みに震えているのを自覚した。

いよいよもみじちゃんとの面談の日を迎えた。前に『夢見の里』を訪れてから一週間が経過し、九月に突入していた。

池内先生が言うには、もみじちゃんは始め、俺達と会うことに消極的だったそうだ。しかし、先生が数日を掛け、なんとか説得してくれたらしい。電話口で俺は何度も先生に礼を言った。

面談場所をファミリーレストランに選んだのは、少しでももみじちゃんの緊張を和らげる為であったが、俺達夫婦にはその効果は無かったらしい。

五分後、見慣れた老婦人が店内に入ってきた。脇に少女を連れて

いる。それは紛れもなく池内先生ともみじちゃんだった。

先生は白のワンピースを着込んでおり、もみじちゃんは前に会った時と同じ、ティーシャツにハーフパンツという出で立ちだった。

俺は立ち上がり、二人に手で合図をする。池内先生が俺達に気付いたらしく、笑みを浮かべながら歩み寄ってきた。途中店員に待ち合わせの旨を説明した後、俺達の向かいに座る。もみじちゃんも後に続いた。

「今日はお忙しいところすみません」

葉子と共に深々と頭を下げる。

「いえいえ」

先生は笑顔のままゆっくりと手を振った。「こちらこそ。手間取らせてしまって申し訳ありません。さ、挨拶なさい」

俺達は思わず少女に注目した。もみじちゃんは席に着くなり俯いたままだったが、やがて背筋をピンと伸ばし、顔を上げた。

「もみじです。……今日はどうぞ、よろしく願います」

彼女は、言葉を探しながらもしつかりとそう言った。

「あ、河岸太郎と言います。よろしく願います」

「妻の葉子です。よろしく願います」

俺達は二人とも、もみじちゃんの丁寧な挨拶に恐縮してしまった。自分の娘になるかもしれない少女に対して敬語で挨拶する……なん

とも異様な光景である。

「紅葉はとても大人しい子でした。礼儀作法も凄くしつかりしてまして、驚きましたよ。施設でキッチンと教えられたんでしょね。でも私達夫婦にとってはそれが少し不安でした。もっとわんぱくな子の方が自然と溶け込めるような気がしたんです。事実、面談は物静かに……そして気まずい空気の中始まりました」

「もみじちゃんは何が食べたい？」

葉子がメニューを広げながら、もみじちゃんに問い掛ける。
もみじちゃんは落ち着かない様子で目をキョロキョロと動かしている。

「あ、えーっと……エビピラフを」

「エビピラフね。私も同じのにしようかなー」

空気を和ませようと一所懸命明るい口調で話しているのが分かる。
俺も話題を振りたいのだが、何も思いつかない。

「もみじちゃん」

先生がもみじちゃんの肩に手を置く。「そんなに堅くならないでいいのよ。もっとリラックスしなさい」

もみじちゃんはずっと背を伸ばしたままだった。彼女はコクリと頷くと、少しでも身体を丸める。しかし、彼女の表情を見る限りでは緊張が解かれたとは到底思えなかった。

注文を聞きに来た店員が去った後、四人はしばらく無言になった。葉子が目で合図をするのを見て、俺は仕方なく本題に突入することにした。

「もみじちゃん、俺達さ。一週間前に子供を引き取りたくたくて『夢見の里』へ行ったんだ」

少女は無言で頷く。「その時、その……君と出会って、なんていうか一目見て君のことを好きになったというか」

最初に出会った子を……というルールは言うべきではないかもしれない。

「河岸さん、河岸さん」

池内先生が話を遮る。「経緯については話してあります。何故彼女を選んだのかも」

「あ、そ、そうですか」

俺は慌てて言葉を探す。もみじちゃんは不安そうに俺を見つめていた。

「もみじちゃん」

葉子が割って入る。「もみじちゃんはどうか？ 私達の子になりた
い？」

俺は驚いて彼女を見る。そして彼女の耳元で囁く。

「おい、急にそんなこと聞いても……」

「早かれ遅かれ聞かないと駄目でしょ」

「でも……」

「しっ」

葉子が口元で人差し指を立てる。俺はやれやれと首を振った後、視線をもみじちゃんに移した。

「どう？ もみじちゃん」

先生が、黙って俯くもみじちゃんに優しく訊ねる。

もみじちゃんは目だけを俺達夫婦に向け、静かに口を開いた。

「分かりません」

その答えに俺は安心する。少なくとも『なりたくない』という答えよりはマシだったからだ。

「そっか……そうだよね」

葉子は一瞬顔を曇らせたが、すぐに笑顔を見せた。「じゃあ、もみじちゃん。試しに一年、いや、一ヶ月一緒に暮らしてみようか？」

その言葉に、もみじちゃんは顔を上げ、黒目勝ちで大きな目を見

開いた。俺と池内先生も同様だ。

「一ヶ月……？」

「そう、私達ももみじちゃんもお互いのことよく知らないでしょ？
それなら一ヶ月一緒に暮らしてみても、これからまずと一緒に暮らしたいって思うんならそうすればいいし、思わなければ、それはそれでいいし。もみじちゃんが選んでくれればいいんだよ」

「おい、それはいくらなんでも……」

俺が話そうとするのを手で制し、葉子は続けた。

「ね、一ヶ月暮らしてみよう。もし途中で嫌になったら『夢見の里』
に帰ってもいいから」

数秒間沈黙状態になった。池内先生はただじつと事の成り行きを見つめている。もみじちゃんは葉子と俺の顔を交互に見た後再び俯き、静かに口を開いた。

「……はい」

「葉子は始めから考えていたみたいです。まずは一ヶ月一緒に暮らしてから、それからのことを本人に決めさせる……。紅葉にとって
は断りようがありませんからね。少し卑怯だったかもしれませんが。
しかしまあ、こうして私達夫婦にとっての一生忘れられない一ヶ月
が始まったのでした」

第五話

国道からバイパスへと入る。ようやく中間地点まで車を走らせた。『夢見の里』から家まで、こんなに距離があつただろうか。バックミラーをチラリと見た。もみじちゃんは一言も発すること無く、ただ窓の外を眺めている。続いて助手席の葉子を見てみる。先ほどまで、しきりにもみじちゃんに話し掛けていた彼女だったが、話題が無くなったのか、彼女もじつと窓の外に目を向けている。

先ほどのファミリーレストランでの池内先生とのやりとりを思い出す。

「それでは、もう早速もみじちゃんを連れて帰りますか？」

「え？」

思わず、その時飲んでいた食後の珈琲を噴出しそうになる。「もう大丈夫なんですか？」

「うちの方は準備は整っていますよ」

池内先生は目尻に皺を寄せながら言う。「もみじちゃんも良い？」

もみじちゃんは少し戸惑いながらも黙って頷いた。

「そうですね……」

はつきりいつて心の準備が出来ていなかった。まさか今日、もみ

じちゃんを家に連れ帰ることになるとは想像していなかった。少なくとも一週間程度目を開けるものだと考えていたのだ。「おい、どうする?」

葉子に小声で聞く。すると彼女は呆気に取られた様な表情を見せた。

「なんで? 良いじゃない。早速家に来てもらおうよ」

「でももうちょっと部屋を片付けてからでも」

彼女が苦笑する。

「馬鹿ね。私達はもみじちゃんを娘にしよって言ってるのよ。そんなにかしこまってどうするの?」

俺達の話が聞こえたらしく、池内先生がうんうん、と頷いた。

「それもそうだよな……」

俺は決意を固めると同時に、珈琲をグツと飲み干した。

気まずい沈黙状態は続く。頼りの葉子はいよいよ眠りに落ちてしまった。彼女の神経を疑う。どうしてこの空気の中で眠ることが出来るんだ。いつその事、もみじちゃんも眠ってくれればと思うが、彼女の目はしっかりと開いていた。

彼女に聞きたいことは幾らでもあるはずだった。しかし、いざ口を開こうとすると頭が真っ白になってしまい、言葉に出来ない。

結局、家に辿り着くまで俺ともみじちゃんが言葉を交わすことは

無かった。

駐車を済ませ、エンジンを止める。俺は助手席の葉子の肩を軽く叩いた。

「おい、家だぞ」

「ふあーあ、あれ？ 寝てた」

葉子は呑気にあくびをしながら、後部座席を振り返る。「もみじちゃん。着いたよー」

「はい」

もみじちゃんはそう答え、自主的に車から降りた。俺と葉子も後に続く。目の前に佇むアパートをぼんやり見上げるもみじちゃんの肩に、葉子が手を置いた。

「ここの一階が我が家。もみじちゃんも今日から一緒に暮らすんだよ」

もみじちゃんはコクンと頷いた。

玄関の扉を開け、俺と葉子が先に中へと入る。そして俺は玄関先で佇んだままのもみじちゃんを手招きした。もみじちゃんは少し躊躇しながら靴を脱ぎ、「お邪魔します」と言いながら、部屋に上がる。葉子がプツと噴出した。

「お邪魔します、じゃないでしょ。今日からあなたの家なんだから」

「はい」

そう答えて、もみじちゃんは少し顔を赤らめた。

夕食の準備がある、と葉子はそのままキッチンへ向かった。俺はもみじちゃんを連れてリビングに入る。

「ふうー」

大型ソファに座り、一息吐きながら壁のアナログ時計を見た。「もう二時になるのかー」

ふと、もみじちゃんが立ち尽くしていることに気付く。

「どうしたの？ こっち来て座りなよ」

俺は自分の横のスペースを指差した。

「あ、はい」

彼女の返事を聞き頷くと、俺はテーブルの上にあったりモコンを掴み、テレビを付けた。やがて、隣にもみじちゃんの座る気配を感じる。

時折独り言など発しながら、しばらくテレビを眺めた。なかなか隣に座る少女に顔を向けることが出来ない。先ほどの車内と同じ、気まずい空気が流れる。

葉子がいてくれればな……。

そんなことを考えながら新聞を手を取った。テレビ欄に目を通してみる。

「あ！野球があつてたんだつた」

俺は根っからのプロ野球ファンだ。覇貞チームのデーゲームが生中継されることをすっかり忘れていた。

急いでリモコンを操作し、チャンネルを変える。しかし、画面に映し出されたのは見覚えのある女優だった。どうやら推理モノの二時間ドラマが放送されているようである。

「あ、あれ？ 中止かな。いや、でもドームだしなあ」

その時、突然もみじちゃんが言葉を発した。

「この人……」

俺は彼女を見た。彼女はテレビに映る女優を指差しながら続ける。
「私と同じ名前だつて前に先生が……」

再びテレビに目を向ける。

「ああ……」

その女優は、有名な作家の娘で名前は確かに紅葉と叫ぶはずだ。
「本当だ。同じ名前だね」

また彼女に向き直る。すると妙な違和感に気付いた。なんだか彼女の顔の位置が高いような気がするのだ。そのまま彼女の下半身へと目を移す。次の瞬間俺は思わず声を上げて笑ってしまった。

「おいおい、行儀が良いにも程があるぞ」

「えっ？」

彼女は一瞬戸惑うも、すぐに俺の言葉の意味が分かったようだ。なんと彼女はソファの上で正座していたのだ。

「ソファなんだから、もっと楽に座っていいんだよ」

「あ、でも」

彼女は足を伸ばしながら言う。「正座じゃないと失礼かなと思って」

「それは座布団に座る時だろ」

俺は相変わらず笑い続ける。可笑しくて仕方なかった。すると、もみじちゃんも俺に釣られたのか、少しずつ顔がほころんでゆく。やがて彼女から小さな笑い声が漏れた。

「ハハ、アハハ」

「ハッハッハ」

二人で笑っていると、葉子が何事かとキッチンから顔を覗かせた。

「何？ 何？ どうしたの？」

「いや、こつちの話。ハハ」

葉子はポカンとした表情を見せた後、微笑みながら「変なの」と

眩いた。その言葉はどこか満足そつな響きを持っていた。

「紅葉に対して緊張していた自分が情けなくて仕方ありません。初めて見る彼女の笑顔はとても愛らしく、今まで私の中にあつた不安や戸惑いを全て吹き飛ばしてくれました。この笑顔の為に頑張ってきたんじゃないか、この笑顔を失いたくはない、この笑顔を守り続けていきたい、私は心の底からそう思ったのです。あ、野球ですか？あれは私の早とちりでした。チャンネルが一局ずれていたんです。でも良かったとしましょう。あの時スムーズにテレビが野球中継を映し出したら、私と紅葉はまだ長いこと沈黙してたかもしれません」

第六話

「ねえ、これなんてどうかな」

俺は新聞に向けていた目を葉子に移した。彼女は一着のワンピースを手に持ち、自分の身体の前に広げていた。薄い生地で出来た淡いピンクのワンピースだった。彼女も何度か着ていたのを覚えてる。

「いいんじゃない？」

俺は素っ気無く言って、再び新聞を見る。

「あ、じゃあこれは？」

彼女が次の服を広げたようだが、無視する。無視しなければ、このやりとりが延々と続くのが目に見えていた。

「ちょっとさー、ちゃんと見てくれないと駄目じゃない」

「さっさと決めないともみじちゃん、風呂から上がったままっぞ」

俺がそう言うと、彼女は一瞬黙った後「ちえ」とつまらなそうに唇を尖らせた。

「これだから男ってのは……」

これだから女ってのは、と心の中で呟く。

もみじちゃんの着替えや生活用品のことを俺も葉子も、池内先生でさえもすっかり忘れていた。傍から見ると、実に勝手な大人たちである。

「着替えを持ってきてないんですけど」

日が少し傾いてきた頃、もみじちゃんがおもむろに言った。

その言葉にハツとした俺はすぐに『夢見の里』へ電話をした。

「そつえばそうでしたね」

電話口で池内先生が笑う。「申し訳御座いません。勉強道具や彼女の身の回りのものと一緒に、後日宅配便で送らせていただきます。しばらくはその……よろしければ葉子さんの服などでも貸して頂けませんか？」

俺はもちろん承諾する。電話を切り、もみじちゃんにそのことを伝えると、彼女は複雑そうに「ありがとうございます」と言った。それからすぐに風呂を沸かして、もみじちゃんを先に入浴させている間に、葉子がタンスの中からもみじちゃんが着るのに適当な服を探すこととなった。

寝巻きは結局ティーシャツとスパッツに決まった。しかし、問題は下着である。

「うーん、少し大きすぎるかな」

自分のパンティをまじまじと見ながら葉子は難しい顔で唸る。随

分と滑稽な姿だった。

「少しなんてもんじゃないな。ガバガバ」

彼女は俺を睨みつけた。

「ケンカ売ってんの？」

「別に」

しばらくパンティを見つめていた葉子だったが、決心したようにうん、と呟き、立ち上がった。

「ちょっと買ってくる」

「今から？」

驚いて彼女を見上げた。「もみじちゃん、ふやけちまうだろ」

「だーからー。それまで私の履いてて貰うしかないでしょ」

「なるほど」

彼女はいそいそと外出の支度を始める。一瞬、俺が変わりに行くかどうか、と提案しようとしたが思いとどまった。彼女は女児用の下着を買いに行くのだ。

彼女はもみじちゃんの着替えを持って洗面所に入り、浴室に呼び掛けた。

「もみじちゃん。着替え、ここに置いてくからね」

「ここからはもみじちゃんの返事は聞こえなかったが、彼女のことだから「ありがとうございます」とでも答えたのだろうか。

「あ、キー忘れた」

玄関先で葉子が言った。車のキーはリビングの壁に掛けてある。彼女は既に靴を履き替えているようなので、俺が立ち上がりキーを取って、彼女に渡した。

「サンキュ。なるべくすぐ帰ってくるから」

彼女はドアを開ける。「くれぐれもお風呂覗かないようにね」

「なっ……!!」

「冗談冗談。それじゃ、行ってくる」

俺は彼女を見送った後、リビングのソファへ戻り、ふうと息を吐いた。

覗かないように、か。

十二歳というと、もうそんな年頃なのか、と思った。夢見ていた自分の子供との楽しい日々。そのほとんどが省略されてしまうわけだ。一緒に風呂に入ったり……。学校の父兄参観でよその子と比べてみたり……。少なくとも、もう前者は叶わないであろう。

俺はなんだか切なくなり、両手で顔を覆った。少し自信を失くす。これからもみじちゃんを愛し続けていく自信だ。

せめてあと五年早ければ、と思う。自分の描いてきた子供像に対し、もみじちゃんはやや成長し過ぎているのだ。

今のところはどうぞだろう。

少なくとも、まだ彼女を自分の子供だと思えていないことは確かだった。

「一ヶ月か……」

それはもみじちゃんにだけ与えられた時間ではない。俺にとってもそうだ。この一ヶ月でどう心境が変わっていくか。もみじちゃんを本当の子供として見る事が出来るのか。自分でも全く予想がつかなかった。

どれぐらいそうしていただろう。ガラツと浴室の扉が開く音がする。もみじちゃんが風呂から上がったようだ。数分経って、彼女がリビングに入ってくる気配がし、俺は顔を上げる。

「どうだった？ お湯加減は」

彼女の頬は紅潮している。濡れた髪が灯りに反射し、艶やかに光っていた。

「はい。良かったです」

そう言っただけで隣の隣に座る。予定通り葉子のティーシャツとスパッツを身にまとっている。下にはあのブカブカのパンティを履いているのだろうか。

「葉子が今下着買いに行ってるから……」

少し悩んでから続きを言う。「ブカブカだろうけど、それで我慢してて」

「あ……はい」

彼女は微笑んでから、恥ずかしそうに俯いた。やはりブカブカだったようだ。

「今日はさ、カレー作るんだって。あいつの得意料理なんだ。カレーは好き？」

「はい、好きです」

「そうか。じゃあ楽しみにしてな。他に何か好きなものはある？あるんなら葉子に言っとくからさ。なんでも言ってくれよ」

俺は先ほどの葛藤を振り払うかのように、積極的に彼女に話しかけた。彼女は突然饒舌になった俺に少し戸惑いながらも、なんとか調子を合わせてくれた。

「様々な話をしましたが、葉子が帰ってきた途端、私はピタッと話をやめました。紅葉から言わせれば『なんなんだ？』って話でしょうね。おそらく……例の葛藤を葉子に悟られないか不安だったのでしょうね。心配のし過ぎでしょうけど……。あ、『夢見の里』から荷物が届いたのはそれから三日後のことでした」

第七話

「ただいま」

玄関で靴を脱ぎながら、部屋の中に向かってそう言った。リビングからタッタと床を駆ける音が近づいてくる。

「おかえりなさい」

もみじちゃんの出迎えに、改めて「ただいま」と返し、彼女の頭を二、三度撫でた。そして彼女が見慣れない服を着ていることに気付く。

「お、ようやく服届いたか？」

彼女は自分の身に着けた服をチラッと見て、やがて恥ずかしそうに微笑んだ。

「はい、届きました。勉強道具も」

「そうかそうか」

鞆をもみじちゃんに預け、部屋に上がる。彼女は一足先にリビングへと戻っていった。

ここ数日仕事での疲れがなかなか抜けてくれない。リラックスできるはずの家庭で俺は何故か職場以上に気を遣ってしまう。その原因は、間違いなくもみじちゃん存在である。

彼女が我が家に来て、三日が経過した。初めに比べれば大分マシ

になったものの、彼女との距離は一向に縮まっていけないような気がする。

一方葉子は、俺よりも彼女と過ごす時間が長いということもあり、着実に親子関係を築いているようである。

リビングに入った途端、異様な光景を目にした。

「おかえりー」

葉子が顔だけをこちらに向け、言った。正座して、背筋をピンと伸ばしている。彼女と向かい合って、もみじちゃんはソファに座り、スケッチブックに何かを描いている。

「何やってんだ？」

「見れば分かるでしょ。モデルになってんの」

「へえー」

俺はもみじちゃんの後ろに回りこみ、スケッチブックを覗いてみる。「おお！ 上手だなあ」

そこには葉子を被写体としたデッサン画が描かれていた。柔らかくも力強いタッチだ。十二歳が描いたものとは到底思えないほど秀逸した出来だった。俺が十二歳の頃はドラえもんですえ満足に描けなかっただろう。（今もである）

「ありがとうございます」

もみじちゃんは照れくさそうに右手で頬を掻いた。その右手には短い鉛筆が握られている。

「凄いだよ」

葉子が部屋の隅に置かれたダンボールを指差す。「そんな見えてみて」

彼女に言われるがまま、ダンボールの中を覗くと、そこには絵の具や筆、パレットといった数々の画材道具が詰め込まれていた。いずれもかなり使い込まれているようだった。

「これ、全部もみじちゃんのもの？」

「そう」

葉子は頷く。「着替えや教科書と一緒に送られてきたの。一瞬何かの間違いかと思っちゃった」

「へえー」

「ちょっと……」

もみじちゃんが申し訳なさそうに口を開いた。「もう少しで出来上がるから、こっち見て」

もみじちゃんは、葉子に対しては既に敬語を使わなくなっていた。葉子は俺に向けていた顔を慌てて彼女の方に向ける。

「ごめんごめん、はいどうぞ」

俺はダンボールの中を探ってみた。筆だけで何種類もあり、クレパスやコンテなどの道具も入っている。

「随分、本格的だな」

俺は誰にともなく呟いた。

葉子とスケッチブックを交互に見ながら、もみじちゃんは右手を動かし続ける。やがてその手を止め、「よし」と一息吐いた。

「完成？」

そう言っつて葉子は立ち上がろうとするが、すぐにバランスを崩し、倒れこんだ。テーブルの上の、牛乳の入ったコップが少し揺れた。

「おい、大丈夫か？」

俺は心配になって彼女の顔を覗き込むが、彼女は笑っている。

「足、痺れた……」

「なんだ、そうゆうことか」

彼女の足を突いてみる。彼女は大きく声を上げた。

「ちょっと！ やめてったら」

「ねえ、俺にも見せて」

俺はソファに座るもみじちゃんに手を差し出した。「はい」と彼

女に渡されたスケッチブックを眺めてみる。俺の隣で葉子も顔を出し、スケッチブックを覗き込む。

「凄い」

葉子は感嘆の声を上げ、もみじちゃんを見る。もみじちゃんは照れ笑いを浮かべながら「凄くない」と言った。

「今度は俺も描いてほしいな」

俺はスケッチブックに目を落としたまま言う。やがて、もみじちゃんの様子を窺ってみると
彼女は俺を見据えたまま、固まっていた。

「お父さんも描いてほしいんだって」

葉子の言葉で、ようやくもみじちゃんは頷く。

「はい」

やはり俺ともみじちゃんにはまだ距離がある。なんだか葉子が羨ましくなり、そして腹立たしくなった。

彼女の足をトントンとまた突く。その瞬間彼女は、大げさにのた打ち回った。

「ちょっと……！ 本当にやめてっばー！」

その様子を見て、もみじちゃんは無邪気に笑った。

午後十一時を回った頃、風呂から上がり、リビングへ戻ると葉子がグラスにビールを注いでくれていた。テーブルの前に座り、グラスを手に持つ。

「もみじちゃんはもう寝ついたのか？」

「どうか。今日はよく眠れるといいけど」

この家に来てから、もみじちゃんは毎晩寝つくのに苦労しているようだった。

俺はビールを一口飲む。

「そろそろ慣れたんじゃないか」

「そうだね。あとで様子を見てくる」

もみじちゃんの寝室として南側の小部屋が宛がわれていた。それまでは書斎として使っていた部屋だが、始めから子供ができたら与えようと思っていた。

あつという間にビールを飲み干し、葉子が次の一杯を注ごうとした。

「あのさ」

俺は彼女の横顔に向かって話しかけた。「今度の日曜にでも、三人でどこかに出掛けないか？ 遊園地とか」

彼女はくすくす笑う。

「遊園地なんて行ったことないじゃない」

「いや、もみじちゃんが喜びそうなところって、どこだか分かんないし」

「いいと思うよ」

彼女は頷く。「もみじちゃんもきつと喜んでくれるよ」

「そうだな……。よし」

「葉子の言うとおり、遊園地なんて行ったことなかったの、会社の同僚に散々訊ねました。『おすすめは遊園地はないか？』って。なんとか目的地も決まり、さっそく紅葉に『日曜日に遊園地に行く』と知らせました。自分の為だと解ってるんでしょね。彼女は少し遠慮した様子でしたが、その目は確かに輝いていました」

第八話

日曜日。葉子ともみじちゃんを連れ、午前九時に家を出る。最寄りのインターから、高速道路に上り、一時間ほど車を走らせ、下りる。そこから更に五キロほど行ったところに、目的地『レンジャーランド』はあった。

「ふー、やっと着いたか」

助手席に座る葉子が『伸び』をしながら言う。俺は後部座席のもみじちゃんに目を向けた。彼女は眠たそうに目をこすっていた。

「降りていいよ」

俺がそう言うともみじちゃんは「ハイ」と、ゆっくりした動作で車を降りた。葉子がそれに続くのを確認し、俺は車をロックさせる。

『レンジャーランド』は面積三万平方メートルほどの小さなテーマパークで、安い割には楽しめる、と評判が良いらしい。今日の目的地にここを選んだのも、会社の同僚たちに勧められたからである。

「けっこう人が多いね」

俺たちが車を止めた。『レンジャーパーク』専用の駐車場を見回しながら、葉子が言う。人の姿はあまり見えないが、かなりの車の数だ。

「日曜日だしな。早いとこ中入ろうぜ」

「そうね。もみじ、行くよ」

葉子が振り向き、もみじちゃんを手招く。彼女は既にもみじちゃんのことを『もみじ』と呼び捨てで呼ぶ。俺にはまだ出来ない。もみじちゃんは足元を気にしながら、小さな歩幅で俺たちに並んだ。葉子がフフと微笑む。

「スカート、気になる？」

「……少し」

もみじちゃんは昨日葉子が購入した、膝までの丈のスカートを履かされていた。彼女はスカートを履き慣れていないそうで、朝から歩き方がぎこちない。

「そんなんじゃ、ジェットコースターなんて乗れないじゃんか」

「ジェットコースターは」

もみじちゃんは恥ずかしそうに俯いた。「スカートじゃなくても乗れません」

どれぐらいの時間が経過しただろうか。俺は息絶え絶えになりながら、テーマパーク内のベンチに座り込んだ。

「ちょっと休憩しよう」

「だらしないうー。年寄りじゃないんだから」

葉子は呆れたように腕を組む。彼女はなぜこんなに元気なんだろ

う。

「そんなこと言っても、ジェットコースターばかり何度も何度も乗ってたら、本当に寿命が縮んじゃうよ」

「仕方ないな。そろそろお昼にしよう。さ、レストラン行くよ」

彼女はもみじちゃんの手を引いて歩き出そうとする。

「ちょっと……待ってくれ。もう少し休憩を……」

もみじちゃんは俺たちのそんなやり取りを笑いながら見ていた。

もみじちゃんにとってジェットコースターは初体験だったそうだが、一度乗っただけですっかり虜になってしまったようである。コースターから降りた途端「また乗りたい」と言い出した。初めのうちは良かったのだが、それを三度、四度と繰り返すうちに、俺はすっかり参ってしまったのだ。

「もみじ、お父さんの手を引いてあげなさい」

もみじちゃんがタツタツと走り寄ってくる。もうスカートの違和感など完全に忘れてしまったらしい。

「ありがとう」

もみじちゃんに片手をあずけながら、立ち上がった。そして、彼女と手を繋いだまま、重い身体を引きずり、葉子に追いつく。葉子がもみじちゃんのもう片方の手を握る。もみじちゃんを中心に三人が横に並んだ状態でレストランを目指した。

他人からすれば、どう見ても家族にしか見えないだろうな、と俺

は思った。

レストランでは三人ともエビピラフを注文した。全体的に値がはるメニューばかりの中、比較的安価だったからだ。

「評判通り、楽しい遊園地だね」

俺の向かいに座った葉子がスプーンでピラフをすくいながら言う。

「楽しいって言っても、ジェットコースターしか乗ってないだろ？
他にもティーカップとかメリーゴーランドとかたくさんあるぜ」

「カップルの初デートじゃないんだから」

葉子は笑う。「もみじはもう十二歳だし、もっとスリルがあった方がいよいよね」

口にピラフを含んだまま、もみじちゃんは首を振った。彼女は葉子の隣に座っている。

「ティーカップもメリーゴーランドも乗ってみたいな。お化け屋敷にも入ってみたい」

「ここ、お化け屋敷はないぞ？」

「え？」

もみじちゃんが俺を見て、目を丸めた。やがて残念そうになだれる。「そうなんだ」

「お化け屋敷なら凄く怖いところ知ってるよ」

葉子かもみじちゃんの肩に手を置いて言った。「あ、でもあそこ……夏休みしかやってないんだっけ？　じゃあ、来年一緒に行こうね」

俺は心の中で、『上手い』と叫んでしまった。その『来年』の有無はもみじちゃんが握っているのだ。もみじちゃんはニッコリと頷いた。

それから、ジェットコースターを挟みつつ、様々なアトラクションに乗り、次第に日が傾き始めた。そろそろ夕方六時を回ろうとしているが、もみじちゃんは全く疲れを知らないようだ。本日十度目のジェットコースターを乗り終え、走って戻ってきた。俺と葉子は既にバテており、ベンチで彼女を待っていたのだ。

「飽きないね。本当に」

勢い良く隣に座るもみじちゃんに葉子が言った。

「まだまだ乗り足りないくらい」

「もう！　いい加減にしなさい」

葉子は笑いながら立ち上がった。「それじゃあ、そろそろ帰ろうか」

「うん」

「ふー、今日は疲れたなあ」

俺は両手を高々と上げ、『伸び』をした。

「でも、楽しかったよね」

葉子はおみじちゃんと手を繋ぐ。おみじちゃんは葉子の問いには答えず、少し顔を曇らせて、呟いた。

「また来たいな」

今度は俺が、おみじちゃんの開いた手を握った。

「ああ、また来ような」

三人は、並んで出入り口に向かい、歩き出した。

確かに楽しかった。しかし、おみじちゃんと遊園地に来るのは、ひよっとしたらこれが最初で最後かもしれない、と俺は思った。例えば、一カ月の試験生活を終え、彼女が俺たち夫婦の本当の娘となつたとしても、彼女は既に十二歳である。そろそろ親と一緒に遊園地に行くのも卒業するような年齢じゃないだろうか。

『レンジャーランド』を出ても、おみじちゃんは名残惜しそうに、後ろを振り返っていたが、一番名残惜しい気持ちでいたのはきっとこの俺だろう。

第九話

もみじちゃんが我が家にやってきてから、早くも二週間が経過した。今までは仕事が終わると一目散に帰宅していたが、もみじちゃんがいる生活に大分慣れたこともあり、今日は久々に同僚達と、会社近くの居酒屋へ立ち寄っていた。

「お前最近付き合い悪いじゃないの」

ビールの入ったジョッキを傾けながら、隣に座る末永係長が言った。俺の直属の上司である。飲み始めて、まだ三十分しか経っていないが、彼の顔は既に赤ばんでいた。

「いやあ、今月に入ってからなかなか時間が取れませんか」

「大変だな、お前も」

係長は、顔をしかめ唸った。「急に娘が出来たんだもんなあ。家族サービスで大忙しといったところか」

彼は三十代半ばで、結婚はしているがまだ子供はいないらしい。

「そんなところですか」

「十二歳だっけ？」

奇跡の子
今度は、向かいに座る同期の佐々木が口を開いた。髪を茶色に染めており、それをワックスでピシッと固めている。いつものヘアスタイルである。「難しい年頃だよな。『お父さん、臭い』とか言わ

れたりしねえの？」

「馬鹿。あの子がそんなこと言うわけねえだろ」

思わずそう言ったが、もちろん佐々木も末永係長も、もみじちゃんとか会ったことはない。

「ふーん、そんなもんか。まあ、まだ他人みたいなもんだしな」

事情は既に話してある。

「それでお前、今日は大丈夫なのか？愛しのもみじちゃんが悲しむぞ」

係長がそう言いながら煙草に火を点けた。

「ええ」

俺は頷く。「ちゃんと言ってありますし。たまにはこうやって羽目を外すのも大事ですよ」

「それじゃ、遠慮なく」

佐々木が俺のグラスにビールを注ぎ足した。「今日はとことん飲もうぜ」

奇跡の子

家に帰り着いたのは午前一時を回った頃だった。俺は酔いでふらふらになりながら、出来るだけ音を立てないように鍵を回し、ドアを開けた。玄関は明かりが点いているが、中は真っ暗である。おそらく葉子も、もみじちゃんも既に床に就いているのだろう。

部屋着に着替え、リビングのテレビの電源を入れる。音量を絞つてから、チャンネルを回してみた。特に見たい番組があるわけではないが、まだ就寝する気にはなれなかった。

しばらくバラエティ番組を見ながら横になっていたが、ふと水が飲みたくなって立ち上がる。そして、キッチンに向かって歩きかけた瞬間、俺は「うわっ」と叫び声を上げた。

薄暗い部屋の中に、少女が立ちつくしていたのである。

「も、もみじちゃん？」

少女の正体は（当然ながら）もみじちゃんであった。彼女は目をこすりながら、こちらに近づいてきた。

「目が覚めて……」

彼女はそう言ってソファに腰掛けた。俺は大きく安堵の息を吐き、リビングの明かりを点けた。

「ビックリさせるなよ。急に暗闇の中にポツンと現れて」

「ごめんなさい」

目を半分閉じたまま謝る。いや、むしろ半分寝ているのかもしれない。

俺はそのままキッチンへ歩き、食器棚からマグカップを二つと、冷蔵庫から牛乳を取り出した。続いて牛乳をマグカップに注ぎ、それをレンジに入れる。

「ホットミルク作ってやるからな」

リビングに向かって言った。「はい」と眠たそうな声が返ってくる。

チンと音がし、レンジからマグカップを取り出す。膜を取り除いて、シロップを入れれば、甘い甘いホットミルクの出来上がりだ。俺は両手で一つずつマグカップを持ち、リビングへ戻った。もみじちゃんはぼーっとした様子で俺に注目する。

「顔、赤い」

彼女は表情を変えずに言った。

「顔？ ああ、今日飲んでくるって言ったろ？」

そう言いながら俺はマグカップをテーブルの上に置いた。彼女はぴよん、とソファからテーブルの前に移動する。

「熱いから気をつけるよ」

「いただきます」

丁寧に手を合わせて、彼女はマグカップを持つとした。しかし、すぐに「あつ……」とマグカップから手を離す。

俺は苦笑する。

「だから熱いってば」

「中だけが熱いのかと思って」

今の刺激で目が覚めたようだ。今度は真剣な目つきで、そーっと両手でマグカップを抱える。そして、そのまま一口すすする。

「甘い……」

マグカップを持ったまま顔をほころばせる。俺も思わず笑顔になった。

「甘いだろ。ちゃんと歯磨いてから寝るんだぞ」

彼女はコクンと頷き、再びマグカップを口に近づけた。

彼女の一挙手一投足に目が離せなかった。危なげにマグカップを持つ両手、ミルクをすする際に少し突き出す唇。そしてミルクを飲み込んだ後の満足そうな一息。その全てが愛しかった。

俺は思った。こんなホットミルクで良ければいつでも作ってやる。これから先も。何年先も……。

「飲まないの？」

急に声を掛けられ、我に返った俺は「ああ」とホットミルクを口に運んでみた。心地よい甘さと熱が頭を刺激し、ますます酔いが回ってきそうだった。

俺は言った

「甘いね」

「ね？」

彼女はそう言って笑った。

「私達に残された時間は少しずつ少しずつ短くなっていくのでした。紅葉と暮らし始めて二週間が経過し、一ヶ月の期間を折り返す頃になると、私達夫婦と紅葉の間には、目に見えない不思議な絆のようなものが生まれつつあったのです。それは本当の親子同士なら、元から持っているものなのかもしれません。私達の場合、きっと少し遅れただけなんです」

第十話

キッチンから、包丁がまな板を叩く音が聞こえてくる。ようやく葉子が夕食の準備に取り掛かったようである。トントンという軽快なリズムを聞きながら『何を作ってるんだろっ』とぼんやり考えていた。

背筋を伸ばした状態で椅子に座り続け、約十分が経過した。斜め前方のソファではもみじちゃんが黙々とスケッチブックにコンテを走らせている。時折横顔に彼女の視線を感じ、少し緊張する。

「お父さん」

もみじちゃんが口を開いた。彼女はいつしか俺のことをそう呼んでくれるようになっていた。「別にそんなに硬くならなくてもいいんだよ。自然体で」

冷房が効いているにもかかわらず、俺の額には汗が滲んでいた。また、三分ほど前から腰に痛みを感じている。

「そんなこと言ったって……。自然体って意識したら余計硬くなっちゃまうんだよ」

「ふふ」

彼女は悪戯な笑顔を浮かべる。「お父さんはモデルに向いてないかもね」

夕方七時に会社から帰り着くと、突然もみじちゃんが「お父さん

の似顔絵を描いてあげる」と言ってきた。正直疲れていたものの、以前葉子の似顔絵を描いていた時『俺も描いて欲しい』と言ったのは、この俺自身だったし、実際もみじちゃんからそう言い出してくることが嬉しかった。結局、着替えもしないまま、彼女の絵のモデルを引き受けたのだった。

「更に五分ほどが経過する。」

「あと、どれぐらいで完成？」

だんだんと腰に限界を感じ始めていた為、彼女に訊いてみた。

「うーん、あと三十分ぐらいかな」

「三十分!？」

思わず声を上げてしまった。すると彼女はテーブルの上に敷いたティッシュの上にコンテをそっと置いた。

「それじゃあ、ご飯食べてから再開ね」

俺はホッと安心し、椅子からソファに身を移した。そして「どれどれ?」と彼女のスケッチブックを覗き込もうとした。しかし、彼女はサッとスケッチブックを背中に隠す。

「駄目。完成してからじゃないと見せない」

「なっ? ケチだなー。ちょっとぐらいいいだろ?」

「駄目」

そう言っただけで彼女は大きく首を振った。

しばらくしてから葉子が夕食をリビングに運び入れ始める。もみじちゃんも立ち上がり、葉子の手伝いを始めた。味噌汁、焼き魚とオーソドックスなメニューである。

葉子が一息吐き、テーブルの前に座るのを見て、俺は言った。

「葉子は凄いな」

「何が？」

彼女はキョトンとした顔を見せる。

「絵のモデルだよ。こんな疲れることを毎日のようにやってるんだろ？俺なんか腰はガクガクで、肩もパンパンだよ」

俺のいない平日の昼間に、葉子は何度ももみじちゃんの絵のモデルを引き受けている。現時点で五点以上、彼女をモチーフに描かれたデッサンが存在していた。

「あなた、硬くなりすぎなのよ」

もみじちゃんと同じことを言う。「テレビでも見ながら、楽な姿勢でやればいいじゃない。別に微動だにするなって言ってるわけじゃないんだから」

「そっなんだけどさあ」

俺もテーブルの前に移動し、箸を手を取った。

「そのまま食べるの？」

「え？」

葉子に言われ、ハツと自分の姿を見る。上はカッターシャツ、下はスラックスのままであった。俺はテーブルの端で食事をするもみじちゃんに顔を向けた。

「着替えてもいい？」

「うーん……駄目！」

そう言っただけ彼女は一人で笑う。

結局、夕食後十分ほどで絵は完成した。もみじちゃんは完成した絵をスケッチブックから切り取り、「はい」と俺に手渡した。

「おお！ 凄いなやっぱ」

正直な感想だった。そこには難しい顔で前を見据える俺の横顔が、相変わらぬ繊細で優しいタッチで描かれていた。

「見せて見せて」

葉子が覗き込む。「本当、写真みたいだね。あなたの緊張感がこっちにも伝わってくる」

「ほっとけ」

俺たちのやりとりを見ながら、もみじちゃんが頭をポリポリと掻いた。

「だってお父さん、ずっと顔に力入れているんだもん」

彼女にまで言われて、少し赤面する。

「よーし」

俺は絵を持って立ち上がった。「次までには自然な表情が出来るよう練習しとくから……また描いてくれよ」

「うん」

彼女の返事を聞きながら、デッサンをどこに保管しようか、と部屋を徘徊する。何気なくキッチンまで歩いた時、ふと見慣れない雑誌がキッチンのテーブルに置かれていることに気付いた。

これは……アルバイト情報誌？

葉子に目を向ける。彼女は俺の視線に気付くこともなく、もみじちゃんと何やら言葉を交わしながら、テレビを見ていた。

パートでも探すつもりなのだろうか？ しかし、何もこんな時期に。

少し疑問に思ったので、もみじちゃんが眠った後にでも聞いてみよう、と考えた。

「敢えてこう言いましょう。『審判の日』まで残り十日弱に迫っていました。既に、紅葉のいる生活が当たり前となっていた私達夫婦は、『その日』を難なく通過できるだろうと考えて始めていたので

す。しかし、目の前には意外な落とし穴が潜んでいました」

第十一話

「よし、もみじー。着いたぞー」

後部座席のもみじに声を掛ける。彼女は黙って車を降り、バタンとドアを閉めた。同時に、葉子も車を降りる。

「もみじ。ほら、おいで」

彼女が手招く。もみじは俺をチラッと横目で見た後、タッタッタと葉子の下へ走った。

期日まで一週間を切った。俺達三人は近所のデパートまで車を走らせた。万が一、もみじが俺達の娘になることが叶わなかったら、今日が最後の外出になるかもしれない。

並んで先を歩く葉子ともみじに追いつく。するともみじが俺と葉子の顔を交互に伺い、居心地悪そうに俯いた。明らかに俺達に気を遣っているのが分かる。

三日前の晩のことだ。もみじが床に就いた後、風呂から上がった俺は、リビングで横になり、くつろぐ葉子に尋ねてみた。

「そのこのテーブルにあるアルバイト情報誌、どうしたんだ？」

「ああ」

葉子が身体を起こす。「そろそろパートでも始めようかなって」

俺はハアと溜息を吐く。

「お前、何もこんな時に始めるこたあないだろ」

「だって」

唇を尖らせる彼女。「来年はもみじも中学生になるんだし、何かとお金が必要になってくるでしょう」

「それぐらい」

そう言いながらソファに腰掛ける。「俺の収入だけでなんとかかなるし、お前が働きに出たらもみじちゃんが学校から帰って一人きりになるじゃないか」

「中学だけじゃないよ。その次は高校にも行かせてあげたいし、もみじが望めば大学も……」

「大体さ」

彼女の言葉を遮り、言う。「まだもみじが俺達の子になるってうわけじゃないんだぜ」

彼女は眉をひそめ、俺の顔をじっと見つめた。部屋の空気が明らかに変わる。

「何よ？ あなた、まさか今更、私達の子がもみじじゃ不満だって言うんじゃないでしょうね」

「馬鹿なこと言うな！」

思わず声を荒げてしまう。「そうゆう意味じゃなくて、もみじ本人が望まない可能性だってあるじゃないか！」

「そんなわけないでしょ！」

彼女も応戦する。「今まで一緒に過ごしてきたで分かるでしょ。あの子だってきつと私達の下に来るのを望んでる」

「それはそうだけどさ」

口論はしばらく続いたが、やがて葉子の「夫婦喧嘩なんかしてたら、もみじが居辛くなるからやめよう」という一言により、なんとかその場は収まった。

しかし俺達の喧嘩は一度火がついたら、完全に鎮火するまで時間が掛かる。それは過去の事例からも明らかであった。そして今回も例外ではなかったのだ。

デパート内の喫茶店に入り、珈琲を注文する。葉子ともみじはそれぞれカルピスを注文した。

「もみじ、なにか欲しいものある？ 新しい服とか」

俺は両手でコップを支え、カルピスを飲むもみじに聞いた。

「え？」

彼女が上目遣いで俺を見る。「私は別に……。前、買ってもらっ

たし。お母さんは？」

そう言っただけで彼女は隣の葉子に顔を向ける。すかさず俺は言った。

「お母さんは放っておいても、欲しいもんあったら勝手にどんどん衝動買いするから、気にしなくていいよ」

葉子が俺をキッと睨みつける。もみじがおろおろと、不安げな様子で俺と葉子の顔を見比べた。

そんなもみじを不憫に思いながらも、なかなか葉子と距離を縮めることが出来ない。おそらく向こうも同じだろう。結局、喫茶店で俺と葉子が口を利くことはなかった。

三階、カジユアルファクションコーナーを訪れた。普段はあまり立ち寄らない場所だが、一つ一つ、もみじが着用しているところを想像しながら、服を探していると、なかなか楽しい時間を過ごすことができる。

「もみじー。これなんてどう？ 似合いそうじゃない」

葉子がポップなアニメーションが描かれた टीーシャツ を広げ、言った。

「うーん」

もみじがそれを受け取る。「少し子供っぽいような気がする」

「じゃあ、これはどうだ？」

今度は俺がピンクのキャミソールを広げる。

「えー……。キャミソールかあ」

「キャミソールはまだ早いでしょ」

葉子が目を合わせず、言った。彼女の態度が気に障ったので、俺は思わず反論する。

「お前だつてなあ。もみじ、いくつだと思つてんだよ。子供っぽい
のばっか選びやがって」

「何よ、あなたこそ」

こうなったら止まらない。もみじのことを忘れ、俺達はまた口論を始めた。しかし、それはすぐに打ち止めとなる。

「ストップストップ」

もみじが俺達の間を割つて入る。途端に俺と葉子は黙り込んだ。
「あの……。恥ずかしいから喧嘩は家でやってほしいんだけど」

ふと見回すと、周りの客から注目を浴びてることに気付く。俺と葉子は頬を赤らめ、頷いた。

「ごめん」

「ううん」

もみじが笑つて言った。「私のことだし。仕方ないよね」

その言い方がやけに気になった。
しつこいようだが、期日まで一週間を切っている。

「それでも私達はなかなか仲直り出来ませんでね。昔からそうなんですよ。結婚前にも何度かありました。ちなみに最長記録は二ヶ月です。ふふ……。いえ、笑いごとではありません。結局、『審判の日』前日になっても、私達夫婦は仲直りできないままだったのでから」

第十二話

もみじの様子がおかしい。ここ数日の間、俺が仕事から帰っても、彼女は自分の部屋にこもったまま出てこなかった。昼間だって同じだそう。葉子が何をやってるのか、と尋ねると、「絵を描いてるだけ」と答えるらしい。

絵……？

なぜわざわざ部屋にこもらなければならぬのか？ いつものようにリビングで葉子をモデルにして書けばいいじゃないか。

俺達に残された時間は、もう残り少ないというのに。

一ヶ月の試験生活、最終日。今日ももみじの出迎えはなかった。

「もみじは……？」

リビングで雑誌を読む葉子に訊ねる。彼女は俺のほうを見ずに「向こう」とだけ答えた。

俺は深く溜息を吐く。その溜息には二つの理由があった。

一つはもみじが相変わらず、部屋にこもりきりなこと。もう一つは葉子との仲が未だに修復しないことである。

彼女に黙って、風呂に入る。そして数十分後、着替えてリビングに戻ると、テーブルの上に夕食が並べられており、ソファにもみじが座っていた。

「お帰りなさい」

今、帰ってきたわけじゃないんだけどな、と心の中で呟く。

「ああ、ただいま」

それだけ答えてテーブルの端に座ると、もみじと葉子も食卓に着いた。

沈黙の晚餐。箸と皿がぶつかるといふ音だけが、重なり合っていく。あまりの気まずさに耐え切れず、何か話題でも出そうか、と思っただが、先に口を開いたのはもみじだった。

「お父さんお母さん」

箸を置き、改まった口調で言う。

「ん？ どうしたの？」

目を丸くして、葉子が聞いた。

「今日は私も一緒に寝ていい？」

思わず葉子と目を合わせる。

一緒に寝る……？

それは構わないのだが、何故今日になってそんなことを言い出すんだ。

次第に胸が不安で押しつぶされそうになる。隣でじつと俯いたままの葉子も同じかもしれない。

もみじ……。

お前にとって、今日は最後の夜なのか？

この一ヶ月間、着実に家族としての絆を深めてきたじゃないか。

俺は戸惑いながらも、ただ小さく頷くことしか出来なかった。

いつもは布団を二つ並べて床に就くが、今日は中心にもう一つ布団を並べる。もちろん、もみじのものだ。

葉子が「おやすみ」ともみじの頬にキスをした。俺は明かりを消し、二人に遅れて、布団に横たわった。しばらくしてから、隣で静かに寝息を立てる、もみじの顔を眺めた。

明日、本当の家族になろうな。

そう心の中で呼びかけ、天井に顔を向ける。それから俺もゆっくりと目を閉じた。

まどろみの中、彼女との思い出が頭を駆け巡る。

たった一ヶ月。しかし、忘れることの出来ない一ヶ月の思い出だ。

彼女と初めて出会ったあの日……。

彼女が初めて絵を描いたあの日……。

三人で遊園地に行ったあの日……。

一緒にホットミルクを飲んだあの日……。

絶対に忘れることはできない。

突然、目が覚め、身体を起こす。

今、何時だ？

枕元の目覚まし時計の針は深夜三時を差していた。それから、俺は何故か不安になり、慌てて隣で眠るもみじの姿を探した。もみじは間違いなく、そこにいる。

当たり前だよな……。

俺は安心し、そのまま立ち上がった。そしてキッチンへ向かい冷蔵庫を開ける。喉が渴いたので、お茶でも飲もうと思ったのだ。

ペットボトルの緑茶を手に取り、コップを探す。その時、閉ざされたままのもみじの部屋が目についた。

『絶対に入らないで』

ここ数日、もみじが部屋にこもりだしてから、執拗に彼女が言っていた台詞だ。彼女の言葉を尊重し、俺も、おそらく葉子もこの部屋に立ち入ることはしなかったが、今となっては非常に気になる。一体もみじはここで何をやっているのか。

ペットボトルを冷蔵庫に戻し、ゆっくりと部屋に近づぐ。そしてそつとドアノブを回してみた。

中は真っ暗でよく見えなかったが、特に以前と変わりがないように思えた。俺は首を傾げながら、壁のスイッチを押し、明かりを点けた。

その瞬間、背筋が凍りつく。部屋の南側、窓の隣の壁に見慣れない一枚の絵が飾られていたのだ。そこには満面の笑顔で肩を並べる二人の男女が描かれていた。デッサン画ではなく、丁寧に色が塗られた水彩画であった。そしてそれを描いたと思われる画材道具は机の上に綺麗に整理されて置かれていた。

「こ、これは……」

それは紛れもなく俺と葉子だった。そして俺はその場でうな垂れた。何もかもを理解してしまったのだ。

もみじ……。

こんな置き土産、ちっとも嬉しくなんかないぞ。

寝室に戻り、今度は身体ごともみじの方に向けて横になる。それから彼女の小さな手をギュッと握った。

もみじ、俺と葉子の仲が悪くなったのは自分のせいだって思ったのか？ だから今になって俺達のもとから去っていこうとしているのか？

自然と……。自然と涙が溢れ出す。

あんな置き土産、嬉しくなんかないぞ。あの絵には最も大切なも

のが描かれていないじゃないか。俺達があんな顔で笑えるのは、お前がいるからなんだ。お前がいないと駄目なんだ。

その時だった。もみじの寝顔を挟み、なんと葉子と目が合った。彼女もこちらに身体を向けている。

葉子、お前ももみじの気持ちに気付いてたんだな。気付いてたくせに、俺にも相談できないで一人悩んでたのか？ お互い、素直じゃないよな。

葉子。

また呼び掛ける。それでももみじの顔を見た。

この子が、喉から手が出るほど欲しかった、俺達の子だぞ。名前はおもみじ、いや、紅葉だ。お前の名前から一文字取ったんだ。

彼女の頬を涙が伝う。まるで俺の台詞が聞こえているかのように俺は紅葉と葉子を思いきり抱きしめた。紅葉が小さく「んん」と声を漏らす。

紅葉。

俺達の子だ。

「私達が初め、養子を取ろうとした時の考えは『何が何でも子供が欲しい』というものでした。しかしその考えは180度変わったのです。『子供が欲しい。ただし、その子は俺達の間で、スヤスヤと眠る……紅葉以外には考えられない』と。変わっていないようにも聞こえますが、全く違います。紅葉と本当の家族になることが叶わなかったら、もう子供は諦める気でいました」

第十三話

一ヶ月ぶりに訪れる『夢見の里』は以前より随分と雰囲気が変わったように見えた。その一番の原因として、施設の周りを囲んだ赤々と輝くカエデが挙げられる。

「綺麗……」

葉子はその光景を見ながら独り言のように呟いた。紅葉も彼女の視線を追い、上方に目を向ける。紅葉の黒目勝ちな瞳の中に、小さな赤が揺れた。

三人揃って正門を抜ける。庭は落ち葉で埋めつくされており、一人の若い女性従業員がせつせとタケボウキで掃いていた。

「こんにちは」

挨拶する。彼女は手を止めて、同じく「こんにちは」とだけ返し、再び作業に戻ろうとしたが、ハッと気がついたように紅葉を見つめた。

「紅葉ちゃん」

「お久しぶりです」

紅葉が丁寧に頭を下げた。

「久しぶりー。え？ それじゃあこちらの方々が……」

「河岸太郎さんと葉子さんです」

やたらと他人行儀に俺達を紹介する紅葉。俺と葉子も深々と頭を下げた。

「あ、それじゃあ」

彼女は慌てて、施設の玄関へと走りながら言った。「今すぐ池内先生をお呼びします」

今日のことは事前に打ち合わせをしてあった。

最終的な判断は、全て紅葉に委ねることとなった。一旦紅葉を池内先生に預け、彼女が俺達と共に暮らしていくことを選択すれば、再び俺達の下へ帰る。そうじゃなければ、彼女は『夢見の里』に残り、俺達はそのまま二人で帰宅しなければならぬ。

もし、そうなら二度と彼女と会うことはできないだろう。まさに今日は『審判の日』なのだ。

「お久しぶりです」

玄関先で俺達を出迎えた池内先生は目尻に皺を寄せながらそう言った。「もみじちゃん、良い子にしてみましたか？」

俺は頷いた。

「ええ、とつても礼儀正しくて、凄く良い子にしましたよ」

「そうですか」

続いて池内先生は紅葉に視線を移した。「じゃあ、少しだけでもじちゃんをお預かりしますね」

紅葉は自主的に靴を脱ぎ、廊下にかかる。それからキョロキョロと施設の中を見回した。一ヶ月ぶりの『夢見の里』を懐かしんでいるのかもしれない。

「紅葉」

そんな彼女に俺は呼びかけた。彼女がハッと俺を見る。「待つてるからな」

その言葉に彼女は黙って微笑んだ。その微笑みの意味は分からなかった。

「葉子さん？」

ふと池内先生が葉子の名を呼ぶ。「葉子さんは何か……もみじちゃんに言っておくことはありませんか？」

「……いいえ」

そう言っ葉子は首を振った。彼女は施設に入ってからずっと俯きっぱなしで、一度も顔を上げようとしなかった。

「それじゃあ」

池内先生が院長室まで歩く。「もみじちゃん、おいで」

コクリと頷き、紅葉は池内先生の下に駆け寄る。その時だった。

「紅葉……」

その声は弱々しく震えていた。「紅葉……。お願い、行かないで」

葉子……。

ポタポタと玄関先に彼女の涙がこぼれ落ちる。彼女は顔をくしゃくしゃにして泣いていた。その泣き顔に見覚えがある。いつか……。彼女が手首を切った、あの日の病室で……。

「葉子」

俺は彼女の肩を抱いた。「大丈夫だ。心配するな」

「紅葉。紅葉……」

紅葉は、その光景をただ神妙な顔つきで見つめていた。吸い込まれそうな黒い瞳を輝かせながら。

その瞳に俺達はどう映っているのだろう。

一ヶ月前、同じ場所で初めて見た、俺達の姿とどう変わっているのだろう。

「もみじちゃん」

池内先生が相変わらず穏やかな声で言う。

紅葉は何も言わず、院長室の中へ消えていった。

実際には五分程度の時間であったが、俺にはそれが一時間にも、二時間にも感じられた。きっと葉子も同じだろう。俺達は庭に出て、

ひたすら紅葉を待った。その間、俺はずっとすすり泣く葉子の肩を抱きしめていた。先ほどの女性従業員の姿はもうない。

庭を彩るカエデの葉を見つめる。

もし、このまま二度と紅葉に会うことができなかつたら、この季節が来る度、葉子のこんな姿を見なければいけないのかもしれない。この先、ずっと永遠に……。

同じ空の下、同じ季節の中、確かに紅葉は生きているというのに……。

後ろで物音がする。

俺と葉子は同時に振り向く。玄関先に姿を現したのは池内先生一人だった。一瞬落胆しかけたが、すぐに池内先生が施設の中に向かって誰かを手招いた。

玄関先から、一時も目を離せなかった。

やがて、池内先生に続き、姿を見せたのは紛れもなく紅葉だった。

「紅葉……?」

葉子が口を開く。

「紅葉……」

そして俺も。

にこやかに微笑む池内先生に背中を押され、紅葉は一直線に飛び出してきた。

同時に両手を広げる二人。

そして彼女の身体をしっかりと受け止める。

「紅葉!」

俺達の両腕に顔を埋める紅葉。そんな彼女を俺は強く抱きしめた。

「良かった。本当に良かった」

再び葉子の目から涙が溢れ出す。

「本当は……悩んでたの」

紅葉の声も少し、震えていた。「お父さんとお母さんと、一緒に暮らしたいけど……。でも、私がない方が二人にとってはいいかな、って……。だから……」

「そんな……。そんなはずあるか！」

俺まで堪えきれなくなった。「お前がいないで……。お前がいないでどうするんだ！ 馬鹿！ 俺達が喧嘩するのはな、幸せな時だけなんだ！ だからこれからはガンガン喧嘩してやる！ 約束だ！」

自分で何を言っているのか分からなくなる。でも、別にかまわない。

紅葉がこうして俺達の腕の中にいる。

それが何よりだ。

風が薫る秋。よく晴れた日曜日。

美しい葉をつけたカエデの木の下、遂に新しい家族が増えた。

礼儀が正しく、少しお茶目で、絵が上手な俺達の子。

俺は奇跡なんてものを信じてはいなかったが、その考えを改めなければならぬかもしれない。

帰りの車中、元気を取り戻した葉子が紅葉に聞いた。

「ねえ、どうして急に気が変わったの？」

「あのね」

紅葉は照れくさそうに話し始めた。「一人じゃ決められなかったから……。もし『夢見の里』に来た時、最初に会ったのが吉川さんなら、お父さん、お母さんのところに戻ろうって……。別に意味は無いんだけど」

そして彼女はふふと笑った。

吉川さんとは庭で落ち葉を掃いていた、あの女性従業員のことで、『夢見の里』で紅葉と最も親しい仲だったそうだ。

後に聞いた話だ。本来彼女は、土日は休みを取っていたそうだが、その日はたまたま同僚が風邪で欠勤した為、代わりに出勤していたらしい。

「それから約五年ですか……。高校生になって、少しだけわんぱくに育ってしまいましたが、紅葉は相変わらず元気です。もう、そろそろ帰ると思うのですが……。え？ お会いにならないのですか？ そうですか、分かりました。それでは今日のところはこれで……」

第十三話（後書き）

次回、ラストです。

奇跡の子

最終話

学校の教室だろうか。小学校低学年ほどの子供達の背中が見える。彼らは席に座り、教壇の上の、優しそうな中年女性の話に耳を傾けている。彼女はおそらく子供達の先生なのだろう。

右を見る。俺と同年代ぐらいの、大勢の大人が、子供達と同じように授業に聞き入っている。

左を見る。葉子がいた。彼女は俺の視線に気づいていないらしい。教室の中の一点をただじっと見つめていた、

その視線の先には……。

「それじゃあ、次は河岸さんに読んでもらおうかな。河岸さん」

「ハイ」と返事をしながら、一人の少女が立ち上がる。

紅葉だ。

今の紅葉じゃない。出会った頃の、まだ十二歳だった頃の紅葉だった。

「将来の夢」

両手で作文用紙を広げながら、彼女ははつきりと言った。「私の将来の夢は、二つあります」

ようやく理解した。これは授業参観だ。しかし、俺の記憶にはない光景である。

それに……。

紅葉以外の子は皆、小さな子ばかり。

何故だ？ 何故、紅葉だけ違う？

彼女は続ける。

「一つは画家になることです。小さな頃から絵を描くのがとても好きで、特に人物画を描くのが大好きでした。これからも、友達や家族や、色んな人にモデルになってもらって、色んな絵を描いていきたいと思います」

葉子に目を向けてみる。ようやく彼女が俺に気づく。彼女は俺に対し、満足そうな笑みを浮かべ、再び紅葉に視線を戻した。俺もそれにならう。

「もう一つの夢はお嫁さんになることです。頑張って料理を勉強して、掃除や洗濯もできるようにになりたいです。そしてお父さんみたいなカッコいい旦那さんと結婚して、お母さんみたいな優しい奥さんになりたいです。終わり」

そう言っただけで紅葉はペコッと頭を下げ、着席する。同時に教室中が拍手の音に包まれ、彼女は照れくさそうに笑いながら、俺達の方をチラッと見た。俺も精一杯拍手を送る。葉子を見る。彼女は少し涙ぐんでいるようにも見えた。

明かりの点いた部屋。テレビからバラエティ番組の騒がしい音。俺は頭をぼーっとさせたまま、ゆっくり身体を起こした。先ほどまでの客人が座っていたクッションに、木で出来た小さなテーブル。そして壁には額縁に入った水彩画。見慣れた、我が家のリビングであつた。

夢か……。そうだよな。

紅葉はもう十六歳なのだというのを、ようやく思い出す。

「お目覚め？」

突然、ソファから声がした。ビクリして、慌ててそちらの方を見る。そこには高校の制服姿のままの紅葉が、足を組み、座っていた。片手にマグカップを持っている。

「あ、ああ。なんだ紅葉か。帰ってたのか？」

「うん」

返事をしてマグカップを口元に寄せる。茶色に染められた髪がふわっと揺れた。「誰か来てたの？」

「え？」

思わず声が裏返りそうになった。「ど、どうしてだ？」

「そこ」

紅葉はそう言いながら床のクッションを指した。「そんなお客さんが来た時ぐらいしか出さないじゃん？」

「ああ……」

ホッと一息吐く。「ちょっと仕事先の人でさ。せつかく有休取ったのについてないな」

「ふーん」

「そんなことより、紅葉」

急いで話題を変える。「お前、そんな短いスカート履いて足なんか組むなよ。悪い男が寄ってくるぞ」

「はいはい」

不貞腐れながら、足を下ろす。「お父さんって若いくせに、そうゆうところお堅いよねー。そんなんじゃ早死にしちゃうよ?」

「なっ!」

「それよりもほら……早く飲まないと冷めちゃう」

そう言っただけで彼女はテーブルを見た。彼女の視線を追う。そこには柔らかい湯気を立てるマグカップが、ポツンと置かれていた。マグカップの中を覗く。

これは……。

「ホットミルクか。珍しいな」

珍しいな、というのは彼女が俺にホットミルクを作ってくれたのが、という意味である。

「急に飲みたくなつたから、ついでにね」

そしてまた彼女がマグカップに口をつける。彼女が飲んでいるのもホットミルクなのであろう。

どれどれ、と俺もホットミルクを啜ってみた。

「うん、美味しいじゃないか」

「そうですね」

彼女は微笑みながら言った。「私が作ったんだもん。美味しいに決まってるじゃん」

そんな彼女を無視して二口目、三口目、とミルクを味わう。確かに美味しい……。しかし、何かが足りない。そう……。

「でも、まだまだだな」

俺は意識的に不敵な笑みを浮かべながら、首を振った。「俺の作るホットミルクにはかなわない」

「え？」

紅葉が目丸めた。そして眉をひそめる。「そんなもん、誰が作っても同じじゃん」

「いや、俺のは甘い……。もっと甘い！」

「甘い？」

納得がいかない様子である。「砂糖増やせばいいんじゃないの？」

「そんなんじゃないんだよな」

「はいはい」

彼女は呆れたように唇をとがらせると、また一口ミルクを嚙り、そして皮肉めいた口調で言った。「分かった、分かった。お父さんみたいに甘いホットミルクを作れるように頑張りますよ」

その言葉に満足した俺は、壁の水彩画に目を向ける。屈託のない笑顔をした、俺と葉子が並んでいる。そして中心には紅葉の姿もあった。

「お母さんが帰ってきたら、判定してもらおうと」

まだ何かブツブツと言っているが、気にしない。

彼女の幸せが、俺の幸せだということにずっと前から気づき始めていた。

絵の中の紅葉は笑っている。しかし、ややぎこちない笑顔にも見える。彼女がどんな気持ちでこの絵を書いたのかは分からない。

ただ俺は、これから紅葉が本当の笑顔になるまで、ずっと見守ろうと思う。

そう、葉子と共に。

水彩画の題名は『家族』

悩んだり、

苦しんだり、

泣いたりしながら、その先にある幸せを掴むことを許された一つの家族の姿だった。

奇跡の子

奇跡の子

<完>

最終話（後書き）

『奇跡の子』楽しんでいただけましたでしょうか？
来年より新連載を開始します。

次は本領のコメディ分野にチャレンジしてみようかな？
感想、お待ちしております。夏のラジオでしたー。

追記

やるはずだったコメディの新連載は作者ブログの方でやることに
しました><

『それなら私がいどる』

<http://blog.livedoor.jp/natsunoradio/archives/51186531.html>

興味があれば覗いてみてください

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7925c/>

奇跡の子

2008年8月29日19時17分発行